

### 3 帯広市の都市計画のあゆみ

#### (1) 明治のまちづくり

本市の市街地形成は、明治25年北海道庁による殖民区画に基づく市街地設計から始まります。市街地の区画割りは当初約1,900戸分を画地しました。1区画は約1.2haで道路をはさむ2街区からなり、図のように20等分し、区画は丁目をもって数え、番地は交互に数えました。

道路は、現在の国道38号と236号を軸として碁盤目状に設計され、これに「火防線」と称する斜交する道路が組み入れられました。この都市設計は、本市独特のものであり、アメリカのワシントン市などにみられるくらいです。

(1間は、約1.818m)

#### (2) 大正のまちづくり

開拓がすすむにつれ人口も増加し、新たな地造成が行われました。鉄南地区の十勝監獄用地の開放に伴い、大正11年(1922年)におおよそ2,000戸分が画地されました。

大正14年には、これまでの自由な開拓の仕方を改め、本格的な都市構想を考えなければならない段階にあるとして、市制施行(昭和8年)に向けて計画的な都市計画事業に着手しました。

#### (3) 昭和44年(新都市計画施行)までのまちづくり

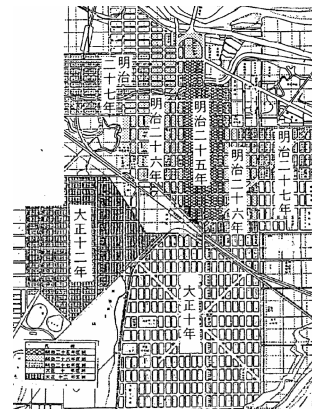
昭和8年には市制の施行、同10年に市域5,017.1haすべてを都市計画区域に指定、昭和19年には都市計画道路や用途地域が決定されました。戦後になると帰還者や離農者の流入などにより人口は、昭和20年の約4万人から同30年には約7万人に、同40年には約12万人と急激に増加しました。このため、昭和30年頃から市営の拍林台団地の造成や十勝農業試験場跡地の開放による宅地造成などが行われました。昭和32年(1957年)には、川西村・大正村との合併が実現して広大な農林畜産地帯を行政区域に加え、面積は、61,894haに拡大しました。昭和34年には、全国に先駆けて総合計画を策定し、「近代的田園都市」を都市像として、近代的な機能をもちつつ、人間尊重を基本に自然環境を大切に守り、都市と農村がともに発展する都市形成をめざしました。

また、工業では、農産加工を中心として各種工場が立地し、その多くは鉄道沿いに集積しました。製糖工場は独自の鉄道を敷設し、原材料の搬出を行うとともに奥地開発をすすめるうえで重要な役割を果たしました。昭和37年からは、市内に点在する工場集約のため帯広工業団地が造成され、各種企業や国鉄貨物駅、卸売市場、道立高等職業訓練校などが順次立地しました。昭和42年からは、新住宅市街地開発事業として計画戸数2,700戸、計画人口1万人の大空団地(約103ha)を造成しました。

【市街地区画割図】



【市街区画変遷図明治～大正】



#### (4) 昭和 45 年以降のまちづくり

昭和 44 年(1969 年)の新都市計画法の施行に伴い、翌 45 年に一体の都市として総合的に整備・開発・保全すべき区域として、帯広市・音更町・芽室町・幕別町の 1 市 3 町による「帯広圏都市計画区域」と「市街化区域及び市街化調整区域」を定め、無秩序な市街化を防止しながら計画的な市街化をすすめてきました。

なお、昭和 46 年に策定した第二期総合計画においても引続き「近代的田園都市」を都市像として掲げ、まちづくりを百年の大計としてすすめていくため、市街化区域をうっそうとした森でつつむグリーン・ベルト「帯広の森」(昭和 49 年都市計画決定)の建設を市民ぐるみで推進することとしました。

これ以降、昭和 50 年代には、柏地区の居住環境整備事業、十勝川流域下水道事業、市街地再開発事業などを行ったほか、西帯広ニュータウンの土地区画整理事業や開発行為など、人口の増加や世帯数の伸びに対応しつつ、都市計画に基づいた民間主体の市街地形成をすすめてきました。昭和 56 年には、帯広・十勝の空の玄関口「帯広新空港」の開港と JR 石勝線が開業し、帯広を中心とする十勝の交通事情が飛躍的に向上しました。

#### (5) 平成のまちづくり

平成元年に連続立体交差事業に着手し、平成 8 年には鉄道高架の供用が開始されました。これにより鉄道で分断されていた南北の土地利用が一体化し、道路網が整備されるなど利便性が高まるとともに、駅周辺土地区画整理事業などの実施により、帯広十勝の中心市街地として、都市機能の充実に向けた駅周辺の都市開発を推進してきました。

また、札幌市・釧路市・北見市につながる北海道横断自動車道が、平成 7 年に十勝清水～池田間、平成 15 年には池田～本別・足寄間が開通しました。昨年(2023)の 10 月 21 日には、トマム～十勝清水間の約 21km が開通し、道内最大級の交通の難所と呼ばれる日勝峠を回避できることとなり、道央圏との往来がより一層安全で便利なものとなり、夕張までの全線開通が近づいています。

更に、広尾町の十勝港に至る帯広・広尾自動車も幸福まで 30km が開通するなど、利便性の高い高速道路ネットワークがすすめられています。

住宅の開発では、平成 3 年から新西帯広地区、平成 5 年から南部地区の宅地開発が行われました。また、平成 15 年からは環境に配慮した稲田川西地区の区画整理事業がすすめられています。

このほか、平成 6 年から、新たな工業団地として西 20 条北地区の造成が行われました。

その後、帯広市みどりのまちづくり条例、帯広市環境基本条例を策定するなど、人と自然が共生し、環境への負荷を抑えた循環型・環境保全型の環境共生都市をめざしてきています。